

第二ヴァチカン公会議開催より 50 年

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

1962年10月11日、法王ヨハネス23世は枢機卿、司教等のカソリック関係者総計2,450人を招集し、第二ヴァチカン公会議を開催した。さらにカソリック以外の宗派からも公式オブザーバーが集った。その教会代表者たちは、ロシア正教会、コプト（エジプト、エチオピア）教会、シリア、アルメニアの正教会、東欧ではロシア以外の正教会、古カソリック教会、プロテスタント側からは、聖公会、世界ルター教会、長老教会、改革派教会、ドイツ福音教会、クエーカー、組合教会、メソジスト教会、自由キリスト者、信仰と職制等から参集した。年1回のセッションが開かれ、1962年より1965年12月7日に閉会するまで、計4回開かれた。4回目のセッション（1965年）には、世界宗教者平和会議（WCRP）の開催準備を進めていた当時の立正佼成会の庭野日敬会長がゲストとして正式に招待を受けた。これはキリスト教以外の宗教、特に仏教徒が公会議に招待されるのは初めてで「異例中の異例」だった。

キリスト教の公会議は今までに21回開催されている。第1回目は325年のニカイア公会議で、第21回が1962年から1965年に開かれた第二ヴァチカン公会議である。平均すると80年に1回の割合で開かれているが、公会議のなかった一番長い時は、トレント公会議（1545～1562）より第一ヴァチカン公会議（1869～1870）までの306年間だ。逆に一番短い時は第16回コスタツツ公会議（1414～1418）から第17回パーゼル・フェラーラ・フィレンツェ公会議（1431～1447）であって、その間わずか13年だけだった。

第20回目までの公会議はその時その時起きた異端審議で、異端者の追放であった。さらに、会議における重大決定は、2回目の第一コンスタンティノポリス公会議（381年）で、聖霊も父と子と同列で三位一体説が確立。3回目のエフェソス公会議（431年）で、マリアが神の母として認定され、9回目の第一ラテラーノ公会議（1123年）で司教叙任権を法王側が掌中にしたこと、20回目の第一ヴァチカン公会議（1869～1870年）では法王の不可謬性をそれぞれ確認した。

しかし21回目、第二ヴァチカン公会議はそれまでの公会議と異なり、異端の断罪ではなく、自分たちの過去の過ちを認め、別れて行った兄弟たちとの一致を図るための公会議であった。

第二ヴァチカン公会議の要旨は次の通りだ。

◎典礼の改革

ミサは話し言葉で行う。それまでのラテン語ではなく、その地の言葉を使用すること。それまでミサに出席する信者に背を向けていた神父は、ミサ出席者と対面してミサを行うこと。典礼の改革に抗議したレフェブリアーニ派は異端とされ、カソリックから追放された。

◎聖書の使用

ラテン語よりの切り替え。各国語への翻訳が加速。教会において、個人およびグループの聖書の読本が可能となる。

◎キリスト教の統合

カソリック教会の歩みは、キリスト教から生まれた宗派との統合の歩みであること。第二ヴァチカン公会議以前には、カソリック以外のキリスト教との会合、対話の参加には特

別許可が必要だったが、今は無許可で参加でき、むしろ出席することを積極的に容認している。

◎エキュメニズム運動

反イスラエル宗教の糾弾。キリスト教徒はヘブライの友であることを宣言。ヨハネ・パオロ二世はイスラエル人を「兄たちよ」と呼んだ。彼と彼の後継者（ベネディクト16世）はユダヤ人会堂（シナゴグ）を訪れ、さらに前者は2000年に、後者は2009年に「なげきの壁」で祈りを捧げている。また、第二ヴァチカン公会議がなければ、1986年ヨハネ・パオロ2世による、また、2011年のベネディクト16世によるアッシジでの「平和の集い」を開催することはできなかっただろう。さらに、第二ヴァチカン公会議は、平和と正義を希求する人たちの協力を要請し、宗教の自由を容認する。現法王は、中東の教会で、「個々の正しいと思う宗教選択の自由」という個人の権利を説教した。

第二ヴァチカン公会議より、ローマ法王はじめ教会の中の人間のイメージは根本的に変わった。衣装、言葉、日常生活でのジェスチャーなどが普通の人間のものに近づいた。

1958年に法王ピオ12世が亡くなり、葬儀が行われた後、コンクラベ（法王選出選挙）が行われた。初めの頃はロンカッリ（Roncalli）、（ヨハネス23世の苗字）の票はなかった。それが選挙の回数を重ねるに従ってロンカッリの票が増えて行き、1958年11月4日に、票の多数を得て、271代法王として選出されたのだ。法王名をヨハネス23世と決定した。

過渡期におけるカソリックにとって、誰を法王に選出するかは大きな問題だった。コンクラベの投票は最初の頃、予想されたように混戦状態だった。規定された以上の、つまり出席者の3分の2+1票以上の投票数を得る枢機卿が現れなかった。そのうちに、是でもない非でもないロンカッリに票が集まり始めた。つまり、コンクラベの態勢としては、法王にロンカッリを選んでおけば、彼の在任中は可もなく不可もなく安泰に過ごせるだろうと考えられたのだ。それゆえに、法王になるような野望も希望も一切持っていなかったロンカッリは法王に選ばれ困惑したようだ。困惑した彼は神と直談判をしたようだ。つまり、「私のようになんらの野心もなく、改革の心を持っていないものが、なぜ法王に選ばれたのですか？」と神に聞いた。神は「あるがままでよろしい。ただ儀式の改革と教会の現代化（AGGIORNAMENTO）をすればよろしい」と言ったようだ。

ロンカッリは「良き法王」（PAPA BUONO）と呼ばれた。これは初期の頃は「無臭、無色、無害の法王」という意味で使われていたようだ。それが、後には「心ある素晴らしい法王」という意味に変わったのだ。

ヨハネス23世が世界の司教たちを2,450名も招集し、会議を開いたことは皆にとって全くの驚きであった。

ヨハネス23世の秘書を務めたローリス・カーポヴィツァ氏は97歳で健在。今でも50年前の出来事を克明に記憶しているという。そのいくつかを記すと、「ヨハネス23世は、公会議が

(11頁へ続く)